

世界へ託す 平和の願い

心にしまった記憶 後世に



被爆体験記を収める祈念館を訪れた宮原さん(中央)。娘のペロナ晶子さん(右)と孫の雪野さんが付き添った
＝長崎市、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館(山口隆行撮影)

「知ってほしい」3世代紡ぐ

あの日の記憶を、世界に伝えたい。そう思えるまでに、80年かかった。長崎で被爆した横浜市の宮原浩子さん(93)。被爆体験を誰にも話してこなかったが、数年前に記した体験記が近く、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館(長崎市平野町)に収蔵される。背中を押したのは、国連機関で働く娘のペロナ晶子さん(54)、孫の雪野さん(16)。いずれもジュネーブ在住だった。

13歳で被爆した 宮原 浩子さん(93) ー横浜市ー

国連機関で働く娘 ペロナ晶子さん(54) ージュネーブー

孫 雪野さん(16)

に限り、冷たい石に腰かけた時、強烈な閃光と爆風が通り過ぎた。爆心地から約1キロ。衝撃で半分以上壊れた入り口を抜け出すと、医科大が窓から火を吹き燃えていた。母とはすぐに再会できたが、姉が見つからない。「お姉ちゃん」。叫びながら、遺体だらけの焦土を捜した。一夜明け、焼けた自宅の近くで、姉の衣服と巾着袋の切れ端が見つかった。姉はついに見つからなかった。姉への思慕と、一緒に壕へ行かなかった後悔は、滅ぶように胸に残った。

最終戦後、結婚し2人の娘を育てたが、戦争や原爆の話はしなかった。思い出すのもつらく、言葉ではとても言い尽くせなかった。数年前、次女・晶子さんのフランス人の夫が「子どもたちに体験を書き残した方がいい」と勧めた。感情が高ぶり、乱れた文字で原稿用紙にしたためた。読み返すと涙がぼろぼろとあふれた。末尾には、こう記した。「戦争とは、悲しみしか残らない」

晶子さんは初めて、母の体験の詳細を知った。国連機関で外交官らの育成に携わる。母の体験を通して、次世代の平和教育の大切さを一層かみしめた。だが、近年は国連への「逆風」を感じている。多国籍の人が協力し合う理想は軽視され、分断と不信から、自国第一主義が広がりつつある。最近になり、母・浩子さんが「自分の体験を世界に知ってほしい」と言うようになった。願いをかなえようと、同館に連絡し、被爆体験記の収蔵を申し出た。孫の雪野さんは、祖母の体験記を英語とフランス語に翻訳した。「学校の先生やクラスの友達に、おばあちゃんの話を知ってほしい」と話す。3人は9日、同館を訪れ、体験記が保存・活用される様子を確認した。「よかったね」。晶子さんが声をかけると、浩子さんはほっとしたようにほほ笑んだ。80年間、しまい込んでいた心の傷は、3世代で世界に届ける平和への祈りになった。(六倉大輔)